



TITLE:

編集後記 (泌尿器科紀要 第6巻第
8号)

AUTHOR(S):

CITATION:

編集後記 (泌尿器科紀要 第6巻第8号). 泌尿器科紀要 1960, 6(8): 710-710

ISSUE DATE:

1960-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111981>

RIGHT:

編集後記

今回、東京医科歯科大学と千葉医大に泌尿器科講座が新設せられて落合京一郎博士及び百瀬剛一博士が夫々教授に就任せられた。まことに御同慶に堪えない。



皮科と泌科との分離に就ては、以前から私は主張しているが、両科が全く別個のものである事は明かである。湿疹と腎結核が同一科目の中には有り得ない。過去に於て両科が未だ独自性を持たず、且つ性病の盛んな時代に於ては、これを中心として両科に連絡があつたが、近年の如く性病が衰えると、その僅かな連絡も断えてしまつた。今では全く無縁のものとなつた。然るに一般世間のみならず、医界に於てさえ、まだ昔の如くに両科に関連あるものと考えている者がある。あきれた事である。学問としてのみならず、最近の進歩した診療を行うためには、専門的にならねばならぬのは勿論であり、实际的、経営的な面に於ても両科は独立して行けると思う。大学病院にては両科ともに患者が増加しているし、総合病院にても同様であらう。唯、皮科は外来、泌科は入院患者が主であると言う特色があるから、個人開業と云う点から考えると、泌科はあまり向かないであらう。従つて泌科医師を志望する限りは、将来は個人開業よりは大学或は大病院勤務を考える事にならう。京大病院の各科別毎月保険点数に於て泌科は内科、外科に次で第三位であるから、泌科の点数は意外に多い。

大学に於て両科が分離すべきは当然である。分離しない大学には大学院を設置したり、専門医を養成したりする資格があるとは云いがたい。分離出来ない理由を何のかのと云わずに、文部省も大学も教授も両科独立のために努力してほしい。

総合病院にては両科を分離すると、両科ともに患者が増して経営上にも好結果が生ずる。1名の医師に両科を担当させる如きは不合理であるばかりでなく、医師を酷使するものである。医長と医員を1名宛置くのであれば、両科を分離して、両名を夫々医長にすれば、病院の資格は上がり、医師にも熱意が湧き、患者も増すのである。病院経営者はその点をよく考えるべきである。

(昭和35年8月)

購読要項

1. 発行は毎月(年12回)とする。年間購読者を以て会員とする。
2. 会員は年間料金 1,000円を前納する。1冊料金 100円、払込みは振替口座番号京都4772番 泌尿器科紀要編集部、或は第一銀行百万遍支店。
3. 入会申込みは氏名(フリガナ)、住所(雑誌郵送先)、勤務先、職地位、自宅開業の別、送金方法を御記入の上編集部宛。

投稿内規

1. 原稿の種類は綜説、原著、臨床報告、その他。寄稿者は年間購読者に限る。
2. 原稿の長さは制限しないが簡潔にする。
3. 原稿は横書き、当用漢字、平仮名、新仮名使いを用い、片仮名には括弧を要しない。400字詰原稿用紙を用いること。附表、附図はなるべく欧文にすること。
4. 文献の書式は次の如くする。著者名：誌名、巻数：頁数、年次。
例。中野：泌尿紀要、1：110、昭30。Lazarus, A.: J. Urol., 45：527, 1941。
5. 300語以内の欧文抄録を記し、之には欧文の標題、所属機関名、ローマ字著者名を附け、なるべくタイプライターを用いること。希望の場合は当編集部にて翻訳します。抄録用の原稿を送ること。翻訳の実費は中受く。
6. 掲載料は4頁迄毎頁 500円、それ以上の頁、アート頁、図表、写真は実費を申受ける。別冊20部を無料贈呈、それ以上は実費を徴収する。この場合には予め希望部数を申込むこと。特別掲載も考慮する。
7. 校正は初校のみ著者校正とし、再校以降は編集者が行う。
8. 原稿送り先は京都市左京区聖護院 京都大学病院 泌尿器科紀要編集部。